

TML、センサ市場の主導権獲得へ

東京測器研究所（TML）は、日本の安全性が最重視される産業分野で用いられるセンサ開発で評価を確立し、その技術力をいま世界へと広げている。

現代経済の原動力はデータである。企業はデータを活用して効率を高め、より良い意思決定を行う。橋梁、トンネル、ダムといった大規模インフラでも、365日リアルタイムで計測・解析を行うことが安全確保に欠かせない。地震や台風など多様な自然災害に絶えずさらされる日本では、こうしたリスクに対応するための高耐久センサ産業が発展してきた。過酷な環境に耐えるシステムを構築するのは容易ではないが、TMLはまさにその領域で事業を築いてきた。消費者向け電子機器に用いられる繊細な部品を想像しがちな「センサ」という言葉とは裏腹に、TMLの製品は堅牢で長寿命。人里離れた現場で風雨にさらされたまま、数週間から数カ月にわたり運用されることも珍しくない。

「当社製品で最も重要なのは、使用環境に適した長期安定性と耐久性です」と社長の木村真志氏は語る。TMLは、環境から情報を取得して拠点へ伝送するための各種トランスデューサ、ひずみゲージ、データロガーを幅広く揃える。木村氏によれば、後段の“伝える”部分では、効率化とコスト低減を求める市場ニーズを背景に、いま革新が加速しているという。

ダムや河川堤防を監視するため山間の僻地に設置するようなケースでは、クラウド通信技術の進歩に期待が高い。「遠隔地ではクラウドベースの監視が運用効率を大きく高め、オフィスにいながら現場データを確認できます」と同氏。既存技術を小型化し、より使いやすいパッケージにまとめる取り組みも進む。携帯型計測器の新製品「TC-37K」は、同社の旗艦データロガー「T-ZACCS」シリーズに加わった最新モデルだ。複数センサ対応や高速データ読み取りなど、従来機で実績のある技術を凝縮し、バッテリー駆動でスマートフォンほどのサイズに収めた。携行性が求められる用途では「ゲームチェンジャー」になると木村氏は見ている。「このハンドヘルド機は高い耐久性を備え、防塵・防滴性能にも優れ、過酷なフィールドワークに最適です」と説明する。

製品開発は木村氏の信念に基づき、すべて自社内で完結させている。「営業が持ち帰るお客様の要望を起点に、開発・試験へつなげ、常に磨き続けている自社技術でニーズを製品に仕上げます」と語る。TMLは高速データロギング分野を切り開いてきた企業であり、TMRシリーズは多用途に使える動的ひずみ計測器として評価が高い。

日本の安全重要産業を幅広く支えてきた実績を土台に、同社はいま、近隣の韓国・造船業をはじめ大型産業プロジェクトが進む地域でも存在感を高めている。「今後は欧州や米国を含め、海外でのプレゼンスをさらに拡大していきます。新たな機会や連携を常に探っています」と木村氏。リーダーとして今後の明確な指標も示している。「創業70周年までにいくつかの節目を達成したい。その一つが年商65億円（約4,100万ドル）への拡大であり、最大の伸びしろは海外市場の深耕にあると見てています」と展望を語った。